融通念佛宗三祖畧傳

完

特36
11

大日本教育會書籍館
三 一函
六 九號
三 架
一 冊

019213-000-3

特36-11

融通念仏宗三祖略伝

平岡　順亮／著

M20.4

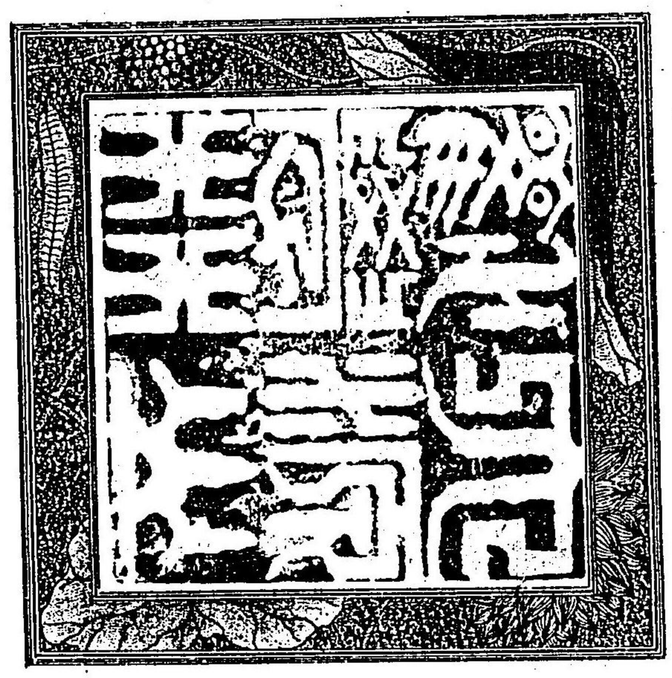
ABF-2805

大源山御法主題辭　醒井大教師序文

泉涌寺御會主席言　平岡中教師著

融通念佛宗三祖略傳

大源山　勸學林藏



特36
11

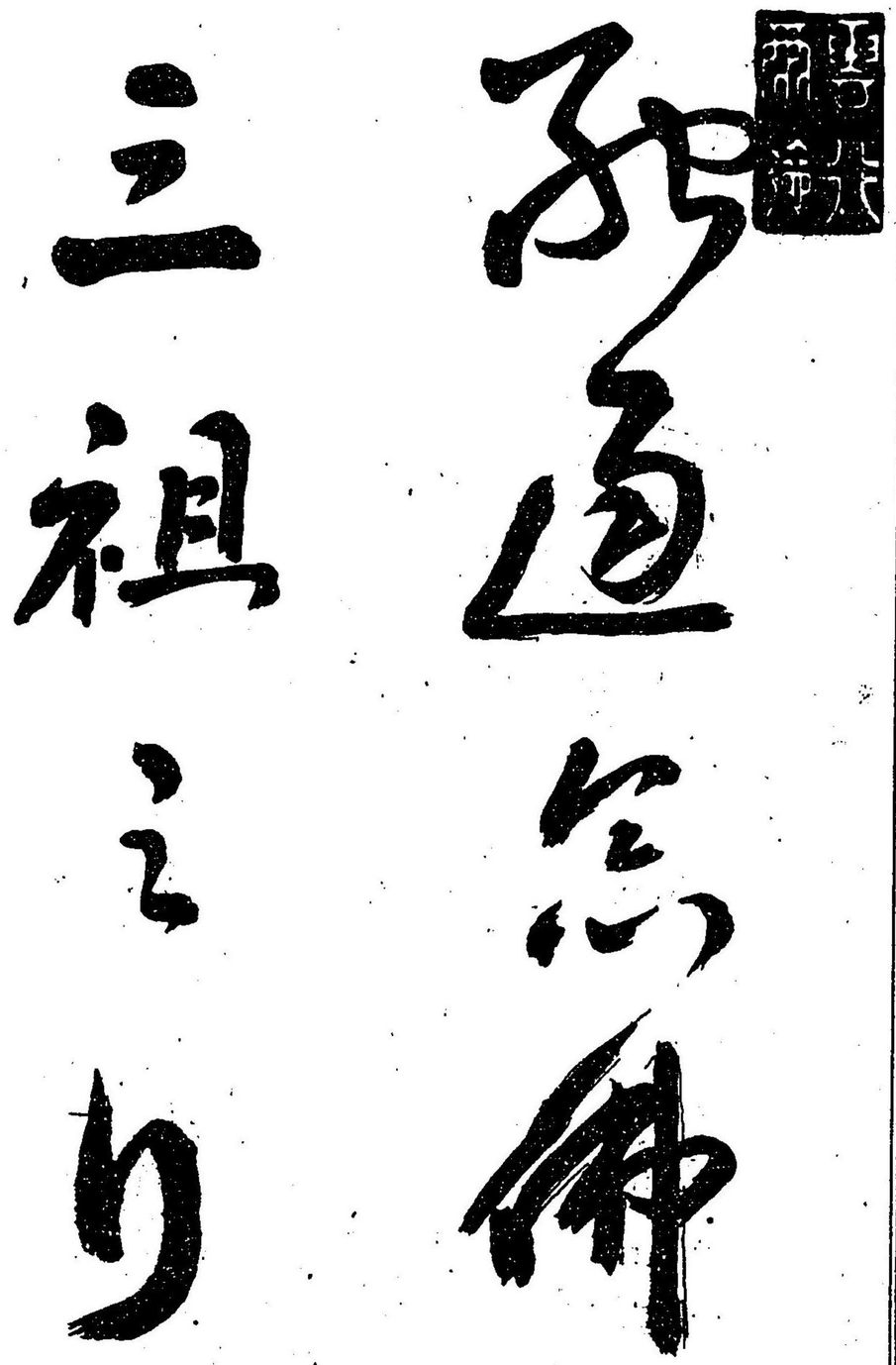
東京帝國大學圖書之印

明治二十年五月十六日内務省交付 第763

貸教育會

大原山知恩寺

大源山知恩寺勧學林


孫道
三祖
之
り

明治十九年
大原山主
奉書

於為未徒
未爭不成

殷望乎

時治十九年歲次己未

大源山

小比丘 旭雅

融通念佛宗三祖略傳序

觚ハ本爵なり簡に非さるなり削ハ本刀なり匣に非さるなり古を以て今を視るに文に依りて物を索む嗚呼幾何か簡匣たらさらん經や論や其れ猶器のごとき乎久しく其弊に堪へさらんとを弊ふ道を併せて而して其真を失ふもんとす夫れ豈明師哲匠の憂たらさらむ哉古乃善く書拔著いす者其

の後世を慮るや遠し故に其辭正一々其理明なり圓門章の如き雜録諸篇の古や紀亦以て古人の一班を見るへきなを謹て我

三祖乃德蹟を考ふるに籍に載る率れ皆國字に從ふ蓋し亦衆人の意を達する爲耶り然り而して世變と物移り當時に在りて亦田畯紅女の猶能く知るところ者今則ち學士の一難事と爲る其の或

亦庫閣に束ぬる者絲編斷絶し文字漫漶

亦是れ焉そ鑿正なかるへけんや平岡順亮子亦我門乃隽士なり常に祖蹟の闕失を憂へ鑿正を以て自ら任を学業乃暇に於て洽ねく舊傳を覧て以て其要を糸り終に一書を成す名つけて三祖畧傳と曰ふ文簡にして義備はれり功を我門に建ふや大耶れ間々貲を捐る者あと之の印行を勸む予其の盛擧を善し數言を卷

首に辨を亦以て祖恩の萬一を報せんと欲するのみ

明治十九年十二月

大源山真光院倍全

融通院印
倍全之印

序

古ノ聖賢高僧世ニ出興シテ教ヲ立テ宗ヲ開キ衆生ヲ導利スル者其ノ一化ノ大事ヨリ以テ止作萬端ニ至ル迄皆ナ悲ク悲智海中ヨリ現起スル所ノ拔苦与樂ノ說教ニ非サルハナシ故ニ其行迹ヲ録メ以テ後世ニ流布スル者蓋ニ其德行ヲ警發スルノミニ非ス亦後進ノ者ヲシテ是ニ由テ信ヲ發シ是ニ依テ行ヲ起シ以テ彼ノ妙果ニ進趣スルヿ在世ノ當時親シク化益ヲ蒙ムル者ノ如クナラシムルノ大利之ニ存スルアリ記傳ノ書豈ニ忽緒ニスベケンヤ本宗曾テ兩祖師繪史傳アリ然レトモ流行既ニ久シク印板磨滅シテ讀者之ヲ患フルヿ茲ニ幸アリ頃日是ヲ翻刻スルノ舉アリ我カ益友平器順喜沙門カラ奮テ之ヲ贊シ研經ノ暇ニ於テ徧ク旧典ヲ閲シテ校正刪補シ加フルニ再興尊者ノ年譜ニ就テ和文ヲ以テ

譯出シ兩祖ノ史傳ニ並セ名ケテ三祖畧傳ト云フ因テ想フニ此書一タヒ出レハ彼ノ信徒ヲシテ婦女子ニ至ルマテ一讀シテ以テ三祖ノ行迹ヲ了知シ是ニ由テ信ヲ發シ是ニ依テ行ヲ起シ以テ登地ノ漸階トナルノ益ヲ得セシムルヤ必セリ今ヤ剞劂成ル靜カ數書ヲ述メ以テ卷首ニ填ス

明治二十年三月

慧念慈突

慧念

融通念仏宗三祖略傳叙

夫佛性遥なるに非ず心を離れて何にか求めん眞如寔に邇し行を加ふれば即ち證る。凡夫い此霊心に迷故に長く生死に沉し。五欲に貪着して度脫を求めきるゝ故に遠劫にも出期あるとゝふく。諸聖ハ此眞性を悟り既に三界を出ゐふと雖とも。衆生の苦に溺るゝを捨て無為の都に入りおもも還りて群生を救済ゐふ。然則凡聖二性なし。迷悟一心に在り。是を以て我大聖釈迦牟尼世尊迹を迦毘羅城に示し。化を五印度の境に垂れ自證の妙法を説き。本具の霊心を示し。諸の衆生をして迷を醒し源に還り等しく覚位に登らしめんと御思召さる。但し機に八萬の病あれば亦八萬の法藥あり。是故に世尊一代所説の法門数無量なりと雖とも。皆諸の衆生をして自身本具の霊性。仏と異ふることを無を悟らしめゐふ為あらざるいなし。然して他力稱名の要門末機に契當し。凡夫に相應をるゝと世尊の金言。諸仏の證誠誰か信奉せざるべけんや。故に像末の時世。和漢の両朝。念仏の宗盛に行はるゝこと具さに陳ずるに遑あら

ず。唯我宗開山聖應大師。智大覚に亞ぎ。位補處に在り大悲物を愍むゲ故に乃ち迹を日域に垂れ。慈尊に面受して妙法を弘演し。普く上下の機を度し齊く利鈍の根を救ひ給ふ。夫融通念仏とハ我一人の所唱を廻して諸の同行に通じ。他の諸人の称名亦我一人に融も。是を以て功徳無邊にして勝利廣大なり。吾等凡夫澆季に遭遇し。既に智拙く行劣る。茲要法開發の勝縁に由に非ざんバ何に由てこの真性を悟入し。何れ乃日ゥ生死を得脱せん。大師既に寂して第六世に至り非運に際會して正統嗣を絶つ乃ち八幡大士の傳持に由て此を中祖法明上人に授け給ふ。爾てより歴代相傳して第四十六世に至り。宗門を復興し檀林を開闢し。廢伐起し絶を継ぎ。大に水山の壯観を成し法燈を今日に傳へ給へるハ。偏に大通老尊者の功也。是を宗門の再興と為ん。三祖の功蹟其れ既に斯の如し。我宗有信の諸人爭て其事迹を熟知して。祖恩を報酬し妙宗に信順せざるべけんや。是れ此冊を公にする所以なりと云爾。

明治十九年十二月

編者識

融通念佛宗三祖略傳目録

開山聖應大師傳

御誕生の事
登叡得度の事
大原御隠遁の事
神異感通の事
聲明業中興の事
融通念佛彌陀直傳の事
王公庶人入會の事
勅して御鏡を鐘に鑄て賜ふ并勸進帳御宸翰の事
毘沙門天王入會の事
鞍馬寺參籠冥衆入會の事

鳥羽帝日課を増し給ふ事
吉野御法樂の事
四天王寺歡喜會の事
大源山濫觴の事
御入滅の事
滅後御告の事
北野天神三千遍行者御示現の事
後桃園天皇勅して大師號を賜ふ事
中祖法明上人傳
御誕生の事
高野登山得度の事
郷里結庵の事

八幡宮神勅宗門傳授の事
茄子作行合靈寶授受の事
平野舊址復興の事
加古教心房御告の事
加古の遺跡並に亀鐘由來の事
至尊御帰仰の事
當麻瑠璃壇名帳籠の事
來迎供養並に圓寂の事
再興大通尊者傳
御誕生の事
捨世志道の事
勤求道法の事

入寺剃髮の事
江府往復の事
復興台命の事
御晋山の事
詔して紫衣を賜ふ及び檀林勅許等の事
億百萬遍大數珠の事
融通圓門章及課誦等撰述の事
般舟堂弥陀大像の事
大佛殿落慶並に東山天皇崩御の事
御入寂の事
舎利歸葬の事

目録終

聖祖大沙門六像

一会こそ特法輪
こそ一会摂進
律司能荘厳
直ちふ点峯相庄上人
ゆ行大直相髭

開山聖應大師傳

御誕生の事

恭〻開山良忍聖應大師御一代の事迹を原ぬるに御生國は尾張國知多郡富田の莊にして御父の本姓は藤原秦氏兵曹道武と稱し知多郡を領して富田の莊に住居す富田殿とも呼し我御母は熱田の社頭大宮司の息女にて御夫婦睦まじく世を送らせ壯年を過るも朱子御世嗣の無りしを歎き同國熱田神社に參籠して一子を擧けんと祈願の滿ずる夜神明の感應にやありけん微妙ある歌唄の聲を聞ゆと覺にて母君御懷姙ありて漸く月數も滿る程ふ人皇第七十一代後三條天皇延久四年壬子の元旦御誕生ありけるが出胎の初音凡庸あらず

とて小字を音德丸と稱せらるゝ後に人聲明の業に秀出して我朝梵唄乃大祖と仰ぎ奉る奇瑞の兆と思ひ知らるゝ最も美しき御事あり

登叡得度の事

漸く三四歳少なりしひわらべ其遊戯常に泥沙を聚めて佛像塔壇に擬らへ合掌禮拜して餘事なし既に齠齔の頃にも成ぬれば聰明叡敏比倫なく奇童の御名鄕閭に聞に御雙親の寵愛も彌増りける然るに宿世菫習の因縁ゆや唯三寶を敬慕し給ひ出塵の御志止むことなく父母の恩愛も之を繫ぐに由なく御年十二の春比叡山都率谷檀那院良賀大僧都の所に送られける夫れ一人乃世嗣と父母の愛育し給へる御身を以て祖先の祀を継ぎ恩を棄て出家すること實に人中に難事にして父母の之を許し給ふも亦難きの中の難事なるべし因て釋尊の昔を憶ふに釋迦牟尼世尊始め太子たりし時生老病死の衆苦を觀じて國土王位を捐て出家學道せんことを御父淨飯大王に乞ひ求ひしに唯一人乃太子にして王位に昇らせまゐらせ御身なりけれども爭で父王の御許あるべき然れども太子出家の御志彌々堅固なりて悃に父王に乞ひ遂に王城を出給ひ斯て檀特山に登り勤苦の御修行なりしが既に佛道を成給ふに及で都率天に昇りて母后乃為に法を説き國に還りて父王を度して道果を得せしめ給ふ彼の真實報恩は世間虚假少善孝養の比に非ず今大師の出家も亦之と符節を合すが如し父母の恩愛を辭して叡山に登り給ふ時に當て父母は宛ら掌裏の珠を失ふの想を為し給ひしも其既に智行兼備して

父母を化度し給ふに及て大師の孝養父母の幸福何者か之に若んや然ば
経に棄恩入無為真實報恩者と説きゐるハ尠ることなや宮ゐらん既
にして良賀大僧都之に経史を授け典籍を誦習せしめ給ふ天資
敏捷にして一を聞て十を知るの御器量をあらはせば聽て天朝に奏聞し出
家せしめんと請ひ即ち度牒を賜ひて良賀大僧都の弟子と爲し光衆坊
良忍と名づけらる爾より夙夜に螢雪の功を積み天台一家乃教觀を習
學して其奥義を探り究めゐる御年十五にして師命により園城寺の大德
禪仁律師に從て梵網輕重の戒法を受得し二十一歳にして仁和寺の
永意阿闍梨に入室し兩部灌頂を承稟ゐる是に於て化制二教の理
趣に達し顕密兩宗の蘊奥を窮め給へども尚弱冠の御身なるに住山三千
の學侶天下四來の僧衆一人として其右に出る者なく遂に叡山の講
主と推され學侶の師範と仰ぎゐひけるこそ稀代の名譽聞も尊と
き事共なり

大原御隠遁の事

禽鳥棲ふ多け給ふ喬木を枯さんことを患ひ木實生ることを繁け給ふ
其枝を折らんことを恐るゝ實に理ある哉斯て大師ゐ三千の大衆を
教導し給ひ貴顕紳士の消息も最煩へけ給ふ出離生死の一大事を
妨げ上求菩提下化衆生の本懐を空しくせんことを恐き座ろ
隠遁の御志を萌し給ひ東塔西谷無動寺の不動尊へ一千日参詣ひ
して行化の本意を遂んことを祈願し給ひ遂に人皇第七十三代堀河

天皇の御宇嘉保年中大師御年二十三みして講主の職を辭し大原の別處に隱棲しゐひぬ其時

一　通夜そもすがらゆゑなくして世のうさ厭ひ果て捨む大原の杉く

又

たれ人うよりもたのもしき身をたのみ奉せぐふる紀答えつる身も

爾より日夜勇猛に勤行精進在しが同じき御守の康和年中故郷富田の御兩親に八大師の德化に感動せしき剃髮染衣の御志の程を大師も御許へ言送らるしかぞ大師御父の法號を圓阿彌御母を念稱比丘尼と名づけ之に文を添てぞ參らせふるその詞の畧に云く

念佛三昧に入ぬるバ諸の佛招ぎざるに來迎し諸天善神毎日に守護し給ふ斯るめでたき念佛をいとなむ人うよそそに見て乃どけき山に心をれくらん

夢の世に夢のうきはしとどつてなぐ紀関係の若しこをせん

こそ乃うれたなき三途の苦死出の山路の物うきに昔を想ひなげくと

もつる罪のかきなる山に入ぬるぞ出期なくて悔るとも甲斐なきさん

乃ひしなし受ぐるき人身をうけ萬劫にも遇ぐ紀此の如來も

御法を聞此度こそ成佛の本懷を遂なまく云云　以上文出和合語

神異感通の事

聖者の垂迹示現し給ふ所凡慮不測の感應も亦多かりける始め園城寺に於て戒法を受得しひし時異人來りて黄金の釋迦尊像を與へ

〻事共ありしが大原に隱棲し給ふ及て其地形を相し給ふに巖石磊峨
として草庵の設に堪ざりしを一夕八字文珠の法を修し給ひしに一山
俄ふ震動して巨巖忽ち獅子と化し走り去るとと見しかば須臾にして
其地平坦となりぬ依て結宇の作法し給ひしを法力や勝りけん鬼魅乃
族相率ひて遁去りしとぞ大師是に於て來迎淨蓮華の二院を創建
し丈餘の尊像を安置し給ふ今尚現に存在せる融通の彌陀是なり斯て
諸禪三昧に身命を委ね華嚴法華に心思を潛め殊に西方彌陀の淨土
に御志篤けまして常に阿彌陀經を讀誦し給ひしに不思議や經卷より數
〻光明を放ちしとぞ此の御經を放光阿彌陀經と稱し今現に本山の
宝庫に藏む大師御一世斯る奇特の御事最多くまして具に記すに遑
らず今に省きぬ

聲明業中興の事

大師嘗て慈覺大師入唐所傳の聲明梵唄を多武峯賴澄阿闍梨に
稟ひ爾餘諸師の音訣を總括して悉く御傳持ありて彷彿る固より天
性の音聲清雅にして自ら呂律に合ひ上多年に修練の功を積み
ひとりまして獨り其妙處を極め稀代の御堪能にて御座在まし一たび引
聲し給へば諸天を感動し龍鬼を悲泣せしめ或は飛禽羽異を息ふて耳
を傾け鱗魚浮ひ出て聽を澄し情あき山川草木に至るまで草の風に
靡くが如し大師の德音に感應せぬは無うけり有時庵室の傍ある瀑布の
下に於て一曲の伽陀を唱へ給ひけるさしも瀑布の雷鳴もその響を失

あひ鏘々として梵唄に和調せしとなん然ぶ之を無音の滝と呼傳へ其瀧の下流二派に分き一を呂溪と云ひ一を律溪と稱ふるとぞ又一夕大師手づから唄策を畫きまゐに忽ち其策中より光明を射出せりといふ是より世推して聲明の中興と爲し諸山大寺の聲明を學ぶ者皆大師を大祖と仰ぎざるなし是より由て大原の地梵唄の靈場と為り今に至るまで絶へず大師の流を傳へ天下の梵唄を司とるこゝ

已上具見元享釈書第廿九巻

融通念佛彌陀直傳の事

去る程に日夜怠らず慇懃に諸の行法を修しまひ又世尊一代の藏經を備へ如來藏と題し正行の餘暇に大藏經典を繙きて智眼を朗に し化他の障を除こうせもふ斯て二十餘年の間常座不眠の精進を累ね正助兼行の功德を積まひしかゞ德行是に虛しからず感應茲に彰はき時に人皇七十四代鳥羽天皇の御宇大師御年四十六永久五年丁酉五月十五日午の刻に當り三昧に入給へる時阿弥陀如來面のりつゝ身相を現じ示誨して言く汝が行不可思議なり一閻浮の中日域の間に一人あり此き誠に無雙なるべし然も汝順次の往生得ぐ記あり其故は我土は一向清淨の境大衆善根の國なり小善根福德の因緣を以て生じ難し汝が行業の如きは假令多生曠劫を經とも順次往生の正因に備へ難し速疾往生の正因を教へんと思ふ所謂融通念佛是なり融通念佛とは一人一切人一切人一人一行一切行一切行一行是を他力の往生と名づく乃ち偈を説て十界一念融通念佛億百萬遍功德圓

滿と宣ふ言ふ意は一人の稱名を以て衆人の功とし衆人の念佛を以て一人の德と為す又念佛の一行を以て餘の萬行を通じ萬行を以て念佛の一行を攝むる故に功德も廣大に往生も順次なる〳〵一行僅に修すれバ萬行即ち成就し一人往生を遂ぐれハ衆人も往生せん事疑ひなべうしかあり大師既に佛の示誨を蒙りむし多年の祈願始めて滿足し普濟の要法茲に開發しけるに御喜悅の餘定より出て四邊を瞻仰しもゝぐ一山忽ち金色と變し七寶樹林玲瓏として加之異香馨り天樂聞ゆ宛ら安樂淨土の功德莊嚴ふ異あるべく此時大師彌陀如來の御手づから十一尊の曼荼羅像并に御幡を感得しもふ其尊像は大師定中に感見しもふ所乃彌陀示現の尊影に毫も差はす實に是れ我宗の本尊にして彼の佛勅の十字一念融通念佛の旨趣を詮表し上根下機普ねく利し一念多念悉く濟ひふ彌陀の印信にして我等往生淨土の證標なるこそ頼母しくも亦辱なき事の限なりけ

編者曰く此段元亨釋書第十一卷ふ載る所異途あり釈書は次下に出る毘沙門天王の勸告を訛轉せし者あり辨ずべあるべく

王公庶人入會の事

桃李言はざれども下自ら蹊を成し趙璧光を韜めども輝を連城ふ發す茲に大師阿彌陀如來の示現を蒙り融通念佛の妙旨を領解しふと雖ども機緣の未ざ熟せざるあや尚草庵に閑居して未ざ都會に出て世人を勸化しもはざりき然とも貴賤男女の此事を聞傳へ

跡を尋ね道を求る者陸續として來り訪ふ大師懇に教化
しるしが中にも鳥羽天皇の皇后待賢門院の命婦尾張といふ人
尾張守高階為遠の一女なるが殊に大師乃德化を敬慕して常に
草庵に來り此念佛を受け後遂に大師に從ひて薙髮し比丘尼と
なり名を妙法と呼び別に草庵を結び信心堅固にして大往生を
遂しとぞ又和泉前司道經が女子大師の所に往て當日に落髮し
法名を如々と稱して融通念佛の行者となり臨終正念に往生を
遂ぐ此の如く化益も多き中に或時鞍馬寺の毘沙門天王威容
を現じて大師に告て言く師先に佛の示現を蒙むりて融通念佛の
直授を受ぐ盍ぞ流化勸進して苦海の群生を救濟せざるやと

是に於て大師時至り機熟するを知しめし天治元年六月九日始めて
聚落に出で詔を奉て禁裏に入朝たりしかば鳥羽上皇皇后待賢門院
と俱に融通念佛會に入りたまふ宣旨ありて盡未來際の日課百遍づ
ゝ受させたまふ此時公卿百官より下賤人に至るまで競て入會する者
その數を知らずといふ

勅して御鏡を鐘に鑄て賜ふ並に勸進帳御宸翰の事

鳥羽上皇及び皇后三公九卿諸司百官に至るまで日課勤行怠りおこ
なはず上皇感の餘多年龍顏を照したまふ尺有二寸の御姿見を鑄
て扣鐘とし勸化弘通の擊節にして施したまふ昔し隋の煬帝藻鏡を
天台智者大師に布施したまへると思ひ合して最有難き事共なり其上

上皇自〻融通念佛勧進帳を製し之を宸翰にして大師に賜ふ其文に曰く

敬白　貴賤男女をすゝく此念佛の名帳に入奉りてとりに彼國に往生せしむと請勧進帳

南無阿彌陀佛

と見江〻大師の化導常に彼の鏡鐘を撃ち及び勧進帳を持して諸人を勧めゝ〻中祖法明上人の時或る事縁に因り鏡鐘を改めて亀鐘と稱し今現に彼の勧進帳と倶に寶庫に蔵めらる

毘沙門天王入會の事

斯て大師は都鄙有縁の貴賤男女を勧めて融通念佛の日課を受しめ其姓名を宸翰の名帳に記録して之を如來蔵に納め奉り執筆には常隨の高弟嚴賢尊永の両所と見江〻大師此念佛を勧進し給ふ間に一日青衣を着せる壯年の僧大師の大原の庵室に來りて念佛の會に加入せしめんと請ひ名帳を披きて筆を下し畢りて忽然見江ずなりぬ大師不思議の思を為し名帳を御覧ずるに正しく此文なり奉請念佛百遍佛法護者鞍馬寺毘沙門天王念佛結縁の衆を守護せんが為に來生〻と云〻

是の如き奇瑞の感應は我朝にとりては稀代不思議の事なれば

鞍馬寺參籠冥衆入會の事

鞍馬寺毘沙門天王化來して日課百遍を受けもひしより大師彼

の天王幽賛の深きを知り喜敬感極在まし其翌天治二年乙巳四月四日鞍馬寺に参詣して通夜念佛しゐに子の刻に至りて天王忽ち現じて大師に告て曰く我先に日課を受てより日々怠りなく修行し融通念佛の功德彌々廣大にして餘の行法に踰さるを知まり故に我を師に代りて上は梵天帝釈日月天子等を始め下は焔魔王界冥官冥道に至り及び日本國中八百萬神伊勢両宮男山八幡春日大神住吉四社北野天神等を始め所有天神地祇遺りなく勧化して各々日課百遍を受け盡未來際退轉なく勤修すべきの誓約を為し自ら已名を記さしめとして一軸の書を授けらる大師受て之を披覧しゐふ所の天王の告に差はず諸天善神星の如く列名せりその一々の名字具に載て大縁起等に見てとり然まで吾等名帳に加入する者は彼の諸天善神と等しく融通念佛の同行あり諸天善神の唱へる念佛係しゐて通して吾等が往生の行となり吾等が唱ふる念佛亦通じて諸天出離の行となる故に此念佛衆に列なる者は毎日億百萬遍の行者なり又諸天善神は吾等同行を守護して影の形に随ふが如し豈深く喜ざるべんや是故に吾等同行は諸の神祠に参詣せば必ず善神の信じ在ます所の融通念佛を唱て法樂に供へ奉り毫も忌憚なくべし彼の神前に於て念佛申すを忌嫌ふが如きは謂まなき横計にして却て神明の旨に悖る者なり深く思はんばなるべし

ず是の如く既に毘沙門天王の勸進に依て諸天善神の入會ひ
うくもう大師御志一層奮激して廣く諸國の老少男女を勸め同く
念佛衆に入らしめ給ふ爰に稀有あるべき人倫の心ゐる與善結緣い然る
ことなるべき慮りあき鳥獸に至るまで此の善願に與して大師の御
前に詣で融通念佛の結緣に預る由見聞こと是亦不思議の事ども
なり

鳥羽帝日課を増ずる事

是より先鳥羽上皇此の念佛百遍を受させ給ひて信心弥々増
長しまし再び大師を禁裏に召させ這回日課の數を増して一
千遍とすべき旨仰せられ其上諸山大寺の僧綱に宣旨ありて此念

佛衆に入らしめ給ふ

吉野御法樂の事

爰に一年大師念佛勸進の為め大和國に御巡化遊ばされし頃しも
陽春櫻花の候なりければ吉野に遊覧しまして宛も吉野神祠祭禮
の當日なるを聽て神輿の過き給ふを拜禮し奉る所に間近く渡御な
りし時異なる哉神輿俄に重量を増し其處に直と止着し多人力
を合すとも更に動揺くべきもなければ詮方なく神巫をして神慮を
程を伺はせ給ふに神託なりけるは此中に一人の善男呂律に達する
聲德の沙門なり一曲の伽陀を奏させ我五衰の憂を除くべしと
有ければ人々大師を尋ね求め慇懃に唄讃を請ふにぞ大師即ち

神慮に任せ一場の法音を演暢ひしに不思議や神輿輕々と打擧り障りなく渡御の儀式も濟に〻り斯る因緣に由り大原山の鎮守として此權現を勸請しまひ今尚神祠廢せず又我宗本尊十一尊像五幅の曼荼羅の中第四に吉野山藏王權現の化現して画き奉る所なりといふ由緒なり〻事にて始め吉野への路次布留三輪を經て彼の三ツ山を看過し孫の折一の婦人道を遮りて融通念佛の化度をこふ者なり大師乃ち入會を聽し十念を授けひけば忽ち消に失ぬ世に傳ふ是れ此靈が假に形を現して大師乃化緣に由り三途の苦患を得脫せし者なりと夫或は然もなりもん三ツ山と言へ畝火山天の香具山耳無山是なり斯る所由なく

大和國には古來宗門殊に多く弘布すゑにぞなる

四天王寺歡喜會の事

夫荒陵山四天王寺と言へ聖德皇太子の御願として佛法最初の靈場古佛轉輪の勝迹極樂東門の直路觀日不退の淨刹なり此を以て代々の碩德高僧此靈壤を尋ね此聖迹を蹈ざるはなし爰に大治二年大師も亦前蹤を慕ひ且つ名帳勸進の爲とて浪華津に出て此大寺に詣でゝひしに折しも秋候彼岸の時なりしかゞ此寺の西門華表の下に於て衆人を唱導して融通念佛を勸進し異口同音に稱讃念佛して俱會一所の結緣と爲しゝ孫に此に由て中祖法明上人繼で此式を建て再興大通尊者に至りて大に之を復興しひし今に至

るまで毎歳春秋二氣彼岸の中日には我本山より本尊を護持し彼寺に詣で踊躍念佛の歡喜會を執行して絶ることなし傳へ説く開山大師は觀音薩埵の垂迹聖德太子の後身なりと蓋し誣ざるなり

大源山濫觴の事

斯て大師は四天王寺を立出でゝ此より河内の南に觀心寺金剛峯磯長の廟などに便に隨ひ委〻巡歴在せ〻勸進入會の巨益も多うして途次平野に〻〻せゝ先づ修樂寺に旅宿せりしゝ大師の高德を傳へ聞き遠近四方より聚め來る道俗の殊に許多なるしかべ今の總本山大念佛寺の境地を假に融通念佛の弘通所と定め茲所にて衆人を化導しゝ遂に念佛弘通の本源とあり其後中祖上人之を復興しゝ今に至るまで八百年に垂とすれども依然として融通念佛宗の總本山とあり萬世に至るまで衰廢することなきに偏に大師悲願の力なるべし扨又今の土地を平野と呼ぶこと中古以來の名にして舊は杭全の郷とゝ所あり

御入滅の事

大師一代の化儀應に度べきものは皆既に度し未だ度せざる者は亦皆得度の因緣を為ゝ能事茲に畢りて崇德天皇長承元年壬子二月朔日春秋六十一にして大原の來迎院に於て入滅しゝ七日先だつて豫め死期を知り沐浴端座西に向ひ合掌して至心に念佛しゝ臨終の時に靈瑞あり異香草庵に滿ち紫雲苔砌に

びへ清嵐の嶺ゑ響く聲遥ゑ簫笛琴笙篌の曲ゑまぢひ龍水の石にむせぶ音ハ琵琶鐃銅鈸の調ゑ和を往生の儀式言語の及ぶ所ゑ非ず入棺の時その身の輕きこと鴻毛の如しとゝ御遺骸ハ山城國愛宕郡大原村來迎院の背後に當りて律溪の側に荼毘奉り即ち其處に靈廟を設けぬ高さ二丈餘七級の石浮圖あり語を我宗有信の道俗に寄す苟も宗祖の法澤ゑ浴する者ハ流を汲て源を原ね各自大師の聖廟に參拜ちゝ近くハ河刈石川郡磯長山の聖德太子御廟の東邊ゑ一基の石塔ちり是大師の御遺告に從ゑて建る所ありとゝ

滅後御告の事

大原勝林院覺嚴律師ハ素と大師と斷金の道友ありしゑ大師御入滅の後律師の夢ゑ大師來りて告て曰ハく我既ゑ本意の如く上品上生の蓮臺に往生す是偏に融通念佛の力ありと云云とれを融通念佛の功德決定して虛しからざることを證知し末世衆人の疑惑を除ゑが為ゑ此御告ちりしと見へゝり此外御在世及び滅後に大師の感應念佛の利益顯著ありし事ども一にして足らず具ゑ大緣起及び廣傳ゑ載たり今ハ畧しぬ

北野天神三千遍行者御示現の事

大師御親度の徒衆多きが中とりゆゑ四人の上足ちり曰く嚴賢曰く明應曰く觀西曰く尊永ありり各々大師の瀉瓶ありきとも戒臈老少

の倫序に従ひて次第に法統を承禀ふ即ち尊永上人ハ大師より第五世の法主にぞ當ま尊永上人日課三千遍を勤修ひ殊ふ北野天満宮を信仰ひて一七日參籠しむひし事ひし有時天神尊影を現して三千遍の行者即ち第五祖尊永上人ふ左の頌文を示さる曰く

天神本地身　十一面薩埵　爲度衆生故　示現天神體
我本師彌陀　爲報恩頂戴　毎日稱名號　滿一百八遍
以是念佛功　悉授與於汝　汝行三千遍　亦授與於我
融通功德力　甚深亦甚深　如是修行者　決定生極樂

此の四頌八十字の文ハ北野天神嘗て毘沙門天王の勸進に由て融通念佛日課百遍を受させ給ひて日々怠りなく念佛御唱ひて其念佛の利益廣大なると説示されし者あり然に比叡山安樂院谷の楞嚴院ふ此文を印刻せ梓板を傳來して有信の者ふ印施せるふ其帖子今ふ間存ずる者見る由有難き事にて此の安樂院谷楞嚴院ふ住せし理圓僧都といふが融通念佛勸進帖を記されて現に我本山に傳ハるを以て想ふに天神示現の頌文を印行せし也或ハ此僧都の時あるべし扨又尊永上人の高弟良鎮上人ハ第六世の嗣法にて後嵯峨の奥に隱棲し三寶寺を草創せらる清凉寺の大念佛ハ此時より始まりしなり

後桃園天皇勅して大師號を賜ふ事

大師御入滅より六百四十有餘年を經て本山第四十八世信海僧正繼席の時に當り人皇第百十九代後桃園天皇安永二年癸巳十月六日天皇勅して諡號を聖應大師と賜ふ朝官少納言清原宜光朝臣大納言藤原隆前卿藏人侍從頼熙玉冊を奉戴して本山に使臨す其勅書に曰く

勅良忍上人者以利益衆生爲己任以正法久住爲我願一世歸于道化皆蒙融通之得益萬民服于德行誠彰無尋之感應是以衆罪之霜露懸佛日忽消業障之江海逢船師自渡實無明暗夜之大明燈賢劫千佛之一化身也苟慕其名德宜崇飾因諡曰聖應大師

安永二年十月六日

嗟夫大師功德の盛なる數百歳の下斯る諡號の勅書を賜ること世に有難き事なり然るに勅書に言へる如く大師の實に無明長夜乃巨燈賢劫の一佛化身たるや疑ふべく慈悲普ねく物機を救ひ遺すことなく化益廣く末世に及びて盡ることなきこそ尊とけれ

開山聖應大師傳終

法眼上人尊像

果波三祇之念
深善神祝願
同担荷自利
聲香出于世乃
担荷風同絶之

沙門大通拜題

中祖法明上人傳

御誕生の事

中祖法明上人其先人皇五十二代淳和天皇の朝に仕へ奉り右大臣清原夏野公の苗裔にして御父は第九十代後宇多天皇の朝に仕へ奉り清原右京亮守道と稱し御母は河列平岡の神司主計頭の息女にして容儀の名高かりし桔梗の前と申す方あり き然に其頃天下兵亂絶間なく殊に京師は干戈騷擾甚しければ身を有ち志を養ふに宜しからずとて遂に朝參を辭して河列深江の里に閑居し數郡の長と仰ぎ家門繁榮して何の缺點もなく御座在しかば唯世嗣の無きを憂ひさせ給ひ御夫婦諸共信貴山に參籠して昆沙門天王に懇禱し奉り丹誠虛しからず天王忽ち御告げして汝に西方廣目天王を

授くと宣ひ給ふ程もなく拮梗の前に御懐姙ありせら弘安二年己卯十月十日御誕生ありて小字を信貴千代と呼まゐらせ綺歳に顔を發し檀芽の芳に等しく髫年に異を表ず鳳雛の志に似たり既に御成人ありて権少将清原朝臣道張と稱し文武兩道に練達し諸藝殘なく渉せら給ひ諸人尊敬高かりけふ

高野登山得度の事

世間有為の諸法い皆是敗壞不安の相にして無常老病人と期せず茲に道張君十二三歳の交御両親に先後黄泉に入せけるまゝ老臣澤田源五兼定とゝもに道張君を補育して家督を整理し聽て御臺を迎へ一子を擧けらるゝ永仁正安の比天下時疫流行せり折御臺に御子と倶に果敢なくなり世を去り給ひ今い道張君も座に塵世を厭ひ出離を欣ひ玉ひ同胞の弟刑部丞正次に家督を讓り且愚に家臣兼定に囑托し御年廿五の秋密に館を出させ給ふの時

世の中の憂きたるを捨てのがれんとぞやもけん

と壁に記して遂に高野山に登り千手院谷真福院の俊賢法印を師とし髪を法明房良尊と名けらる晩進の沙彌と雖も固より賢才の天性ふ日あらずして五峰八柱の秘頤を窺ひ兩部不二の灌頂を受け所有密宗の奥儀を究めたり是より天台の宗義を學ばんと御思立師に辭して比叡山に登り四教五時の幽旨三觀十乗の理趣を尋ねて其宗極を領會し斯の如く顕密兩宗に渉り諸家の教行を窺ひ煩惱具足の凡夫出離生

死の要露はゝ西方往生の一行に若く者なしと信解して是より念佛三昧に意を決し給ひぬ上の如き由緒のゆゑに高野山真福院中に上人の真像を安置し又年々我本山へ髪刀を贈り來りて尊像の供仕を最懇に勤ふるを安養院に合して尊像の供仕を最懇に勤ふる

郷里結庵の事

去程に上人は名山大刹に歴遊して碩學知識に参謁して諸法の性相を諮決し稱名念佛を修行して有時郷里深江の舊邸に帰りゐひけるに當主正次家臣兼定を始と親戚故舊相俱に上人の修行の勤勇なる道心の堅固なるを稱讃し何れも感泣ふむせひける叔諸共に上人に詣ひ申しける何卒茲地に留錫して自行勤修の傍に有縁の輩を化導せんと御邸の隙地に膝を容るゝ草庵を営けるに上人斜めならず御喜悦なり即ち是に栖居して念佛三昧に行化を勵ませ給ふ家臣澤田兼定も年老たるに頓て上人の德風に薫ぜられ剃髪して身子と共に西願と號して薪水の給仕を為て餘年を浄業に送りける斯程遠近相傳へ貴賤老少とあく上人の德を慕ひて聚り來り俱に浄土の勝縁を結び現當の巨益を受る者日に多かりける後世此草庵の舊跡に一個の寺を建て法明寺と號して今に至るまで尚絶ざるにあり

八幡宮神勅宗門傳受の事

古に云く道に古今なく人に由て通塞なり苟くも其人に非んば道孤り行あはれずと宜なる哉言ふことや爰に融通念仏の法統開祖大師より第六世良鎮上人に至りて不幸にも法を嗣べき器量の附弟あらしかば石清水八幡大士

深く之を歎こゝろもひ良鎮上人の所に化現して融通の法脈安心の密印残おく御傳持ち其の人開山傳来の霊寶を悉く男山の社殿に蔵めゝ置べき法器の出るを待て之を傳来せゝんと御思召斯て空〳〵く一百有四十年を経さゝが茲に法明上人ゞ行徳の神慮にや契ひけん比へ元亨元年辛酉御年四十三歳の冬十月十五日の夜八幡大士深江の草庵に上人の所に來現して告て曰く我れ融通念佛の正統を傳持ゝ之を継べき法器を俟こと久〳〵今汝心行殊勝にして普済の心切に悲愍の懐深〳〵正に是れ宗法傳来其人なり幸に融通の法統を續ぎ開祖の正宗を承け弘演化導して巨益を海内に布べゝと即ち宗法両脈往生印信等明らかに上人に口授〳〵且へ所有霊寶を悉く護持せゝもべき由仰せられ

茄子作行合霊寶授受の事

上人既に神勅を蒙り融通の正統をさゝへ傳来けるゝ歓喜の餘りにや神慮に酬ひ奉らんとて翌日晨朝より二の弟子を具〳〵八幡を指して詣てられ漸く河州交野郡茄子作村まて来かゝる折〳〵前程の方より社人と覚き数名の人々何やらん尊とき宝器なるへき神櫃に納めゝるを齎し来りけるゞ行合さま上人に向ひ深江の里へ如何ゞ行き候べき又彼の里に法明上人と申す方御座在る由貴僧に御尋ねゝやと問ひけるに上人答へ給ふ我こそ深江の法明房を申すゞ更れ上人と謂るへき者に候ふゞと尚言葉の終らぬに彼の社人等一同に扨は貴僧の御事なるへゝ八幡宮の神勅空〳〵なるこそ幸ひなき實に昨夜我等一同に神明の霊告を蒙りたる久〳〵社殿に蔵まれ

る融通念仏宗の寶物悉く以て嗣法の高僧深江の法明上人に附屬すべき急き取出し彼れ渡すべしとの事あるべき夜の明るを待ち斯くも持参仕つるにて候と述べ上人餘りの不思議さに御感悦限りなく暫く語らるるに良久して社人に向ひ昨夜自らも神勅を蒙むり爾々の法門口授に預り今朝も神恩に酬ひ奉らん者とて社参する為此所まで来合せる由仰せけるに社人等一層神明の霊あるを感佩あとぞ居られける聽て社人に彼の寶物を一々上人の前に陳列あるけるに上人今に解かれる由神慮に任せて悉く其寶物を受取られ其霊寶を申し第一に永久年中開山大師感得北土尊曼荼羅及び之に摸寫する所の四轉の聖圖合して五軸同じく天得の幡一脚並に放光彌陀經護持の法華經梵唄の墨譜次に鳥羽帝より賜ふ所の鏡鐘及び開祖感得の黄金の釈迦尊像此餘種々の寶器數あるに違はず上人曲さに點檢遊ばして彼五軸の尊像を傍ある孤松の梢に掛並へ奉けあるの餘り彼の鏡鐘を打ならし弥陀所傳融通念佛億百萬遍功德圓滿と擧唱し手の舞ひ足の蹈所を知らずして稱名念仏なるとあり是我宗にて踊躍念佛の權與なりとも彼松を見に其枝大に五條に分れて今に生茂り深翠の色改めずして宗門繁栄の微と覚むれば則ち御本尊を掛奉りたまひとて杜鵑の松と名けぬ俗に言ふ本尊掛の松是なりさまで今に至るまで毎年霜月本尊御回在の砌彼の舊跡に於て法事の絶ざる所以なりける事共なり

平野舊址復興の事

佛法遇ひ難きこと優曇華の三千年に一たび開きて最とも遇ひ難きに喩ふ

況んや頓超三界の妙門速昇安養の要法を百數十年の否運に開通す。
をや黙まし上人圖らずも八幡大士の神勅によりて融通の正統を継きまひ歓
喜限りなく艫て御本尊並に諸の寶器を護持し弟子達諸共に摂列
抗全即今の平野この郷なる開山大師融通念仏弘通の舊址へ着杖ありけるが斯る
神勅の霊験に感じ驚き遠近より結縁隨喜名帳入會の諸人貴賤老少相率
ゐて群集し法化の息ふ暇なく漸々に佛殿方丈等を經始しこれ是に於て宗風
を扇ぎ祖燈を挑げ再び我宗の基礎を建ひ〳〵そ最とも美ぐき御事なり

加古教心房御告の事

爰に播磨國に加古の教心房と云て念佛三昧の聖者なり既往生を遂ゑめて程
久しかりけるが夢に法明上人に示現して今度八幡大士の御告として融通念佛の
妙宗を相續しまふと弥陀如來の御本懐三世諸佛の内證に相契て一々誓願
頓偏に末世濁乱無佛の時の極重悪人を摂取しまふ御利益此時に顕はれて一切
善悪の凡夫の心を傾くるの輩皆往生の益を蒙るあると御告ありけまし上人夢打
覚て思召けるに傳へ聞く彼の教心房は彌陀如来の垂迹として此界に化現し衆生を
濟度しまふ念仏の行者なりと昔は勝雄の證如法師に極樂往生の記莂を授け
今亦我に此告ありし我今彼の聖者と世を異にすと雖とも時々夢にも逢奉つ
ることの有難さとて歓喜ひけり

加古の遺跡並に亀鐘由來の事

上人既に教心房の霊告を蒙りまひ其遺跡を尋ねんとの御思立時に元亨
三年癸亥の春摂列難波の浦より船に召され播磨を指して御渡海の中途

颶風俄に吹來り波浪激動して船體將に覆らんとするにぞ船中の諸人心を失ひ生る心地に有ざりけり船頭上人に申すやう是凡事に候ふ子如何に御所持の寶物か龍神望を屬し此船を惱ます申すと覚へ候急ぎ其寶物を海中に沈めよへと言上しければ上人答へ給ふ重寶と申すに此鏡鐘より外無し抑此鐘に辱けなくも鳥羽天皇より我開山大師へ賜り我復八幡大士より傳持する所の靈鐘にして宗門の重寶何物か之に若んぞ假令身命を沈むとも鐘を失ふんこと叶ふべからずと仰せけるに船中の人々歎き悲しみ上人に縋り此鐘の故に多人の性命を失ふんこと本意なくば靈寶貴しと雖も爭か人命に易へんや唯大慈悲を以て疾く其鐘を沈め多人の性命を救ひ給へと異口同音に乞ひ申しけるに上人今は是非なく涙と俱に鏡鐘を海中に投げ給へば不思議や風波忽ちに鎮靜まり何ぞも穢土の凡地にして喜びの中に船は搖磬の地に着しぬ聽て教心房の遺跡に到り最愛に御法事ありしに加古の道俗上人か海上に於て鏡鐘を沈め失ひし由聞傳へ俱共に故教心房が所持せし和鐘を取出して之を上人に贈り奉りて斯る所に貴賤老少群集して念佛入會の益を蒙る者最多かりける既に化緣も濟ければ前の浦より船に召されて鳴保崎より所まで御上りありしが以前鏡鐘を沈めし此所あるとて得に思ひ出ふて隨從の人々に語ふせられ折しも遥向程の海上より小山の如き者浮び來るにぞ何ぞも奇異の思を為して近づくに熟視れば此ん蓬萊を負たる靈亀にして先に沈めたる鏡鐘を頭上に戴き上人に還し奉るにてありけるとて上人夢とばかり打喜び

御手を伸て取上るゝ船中の諸人稀代の不思議と感ぜぬ者ぞあらける想ひに是海龍王随喜結縁の為に霊鐘を暫時頂戴受持し奉るが御帰航の時を待て斯ハ奉還せゝあるべゝ然るに彼亀ハ名残惜氣ある風情にて上人の御船に随ひ来るゝぞ上人頓て御心得十念を授けるゝぞさも嬉氣に頂礼して海底に入りゝされぐ此因縁に由て鏡鐘を改めて亀鐘と呼ぶし霊寶の最位に稱へるに成ん去る程に同年七月八日難波ゝく泉州堺浦七堂ゞ濱に着船ゝるゝに其頃此濱に伽藍のゝゝ時あるべ此所に諸人群参して上人を迎へ随喜與善の勝縁をぞ結び奉る上人御喜悦在まゝ慇懃に御法讃ゝゝゝゝ其後年々七月八日此地に於て佛事を修せゝぞ是ゝ道化彌ゝ盛んにして彼の開山大師の遺儀を慕ひ四天王寺に詣で二氣彼岸に踊躍念佛の歓喜會を為此年ゝゝ興隆ゝて御本尊亀鐘等を守護し大に厳儀を整へ不朽の盛會をぞ定めるひける

至尊御帰仰の事

後醍醐天皇御治世の比阿野中納言清房卿の執奏に由り八幡の神勅及び鴎保崎亀鐘の奇験等具に叡聞ゝ達ゝ天皇御感浅ゝ勅して上人を内裏に召され皇后及び百僚諸共に日課念佛を受け名帳に入會くひけるぞ又此頃ハ宋朝支那の通港自由あゝゝが上人道德の名聲遥に元朝に聞え大元の世祖皇帝至元五年己卯の夏鷲洲郡夫人自ゝ紺紙銀泥を以て書寫せる華嚴經に願意を跋書ゝ薩嚫を添て遠く上人に寄贈ゝ奉る上人其志を嘉尚ゝ受持愛護ゝゝが惜哉今ハ僅に佛

不思議法の一品のみ存在せゝ余是を披閲するに運筆謹正雅致優溢實に凡手の及ぶ所に非ず斯る事ども古來其例少きを覺て上人の道德最勝れさせ給ふと推知し奉つるにぞん

當麻瑠璃壇名帳籠の事

融通大緣起の跋に上人手書して云く

愚僧此の融通念佛の繪百餘本すゝめ侍る意趣は菩提薩埵利物為懷の聖言に順じて六十餘列に一本二本或は多本此繪を遣はして普れ貴賤上下を勸むる所の名帳を當麻寺の瑠璃壇に奉納せしめて決定往生の因に備へんが為に開板せしむる者あり此念佛を在々所々に於て勸めむんとき有所得の心に住し利養の媒として檀越の布施を受用するとかゝ斟酌すべき者あり

此ゞ中に云ふ所の當麻寺の瑠璃壇と申は右大將頼朝公の建立ある曼荼羅道場あり抑も此の曼荼羅は西方淨土の聖者此寺に化來して觀無量壽經の說相を藕絲もて織顯はせる極樂淨土功德莊嚴の靈圖あり其中に上品來迎引接の圖位こそ開山御感得の寥像に符合するを以て上人深く當麻寺に御帰依依在まし護念院を宿坊として御一代勸化の名帳を彼の瑠璃壇に籠納ふ爾しより代々勸むる所の名帳を當麻寺へ納むるを例として天文年中第三十世道阿上人の比まで此例相續せりとぞ

來迎供養並に圓寂の事

上人一代の化益既に畢り御年七十に過ぎ給ひぬれば御附弟興善房に化務

を委ね起臥閑寂を志ざし念誦三昧にぞ御座在しが頽れ生前に臨終の行儀を習ひ聖衆來迎の勝相を面のあたり拝し奉るのと御思立乃ち琵琶鐃鈸瓔珞旛蓋假面羽衣天樂雨華等一々營備して二十五聖來迎の行装を施設し躬う行者となりて観音薩埵の蓮臺に上り勢至菩薩の摩頂を蒙り彌陀如来の後邉に随従して上品の往生を遂る迄の儀式を爲し臨終不退一会往生の本懐を満足せりと歓喜し給ひぬ抑本朝に於て來迎供養の起因を原ぬるに昔慧心僧都深く當麻寺の曼荼羅を信じ給ひし程に衆人に往生浄土の信を起さしめたり寛弘元年弟子寛印と俱に紫雲庵にて來迎聖衆の假面及び法如比丘尼の肖像を彫刻せしれ三月十四日中將法如尼の寂日に於て迎接會を創め給ふ是我朝來迎會の濫觴なり

上人も當麻御信仰の餘り先に瑠璃壇に名帳を納め今復來迎會を摸し給ふにぞなる爾來今に至るまで間斷なく執行なり近來は毎年五月一日より十日の間盛に此の來迎會の練供養に阿彌陀經萬部法要を行なる中祖上人此式を剏め給ひしより人皇第九十八代崇光天皇の御宇貞和五年己丑春三月十九日なりしが幾程もなく同年六月十三日御年六十有一にして安祥正念に大往生を遂げ給ける此日異香薫馥し天樂空に聞へ紫雲靉靆して來迎往生の瑞相著るなりしとあり乃ち本山より程近き河内國渋川郡有馬の墟に茶毘し奉り全骸舍利となりしを上人御在世の比元亨二年の春一日青衣の異人來りて毘沙門天王の尊像を與へ給ひ諸の奇瑞枚擧に遑なしず況んや盛德龍畧を感じ道化異域に及ぶが如き持法讃

世の廣目天王迹を此界に垂るん悲ぎんが焉んぞ能然らんや焉んぞ
能然らんや

中祖法明上人傳終

因ゐ記す往古より毎年本山に於て開山中興兩祖師の御忌日いん
大法會を御執行ひらせらるる現今ハ陽暦に推歩して開山大師の
御忌を毎年二月廿四日より廿六日まで中祖上人の御忌を七月五日
より七日まで各音樂大法事を修行せらるる又再興老尊者の御
忌ハ毎年三月吾に同じく音樂法事を行ひらせらるる信徒なる者
各自記憶して参拝ひるべきなり

再興大通尊者傳

御誕生の事

大通老尊者諱ハ融観別に忍光と號す御父ハ攝列住吉郡平野郷の豪族德田氏後薙髪して祐德と稱す母ハ小林氏の女なり御夫婦の間に未だ一子も無りしかバ大和國長谷寺に詣て觀音薩埵に祈請して遂に懐姙せしまゝ爾より母公ハ自然に辛肉を忌て食しゝ聽て月數も滿じ人皇第百十一代後光明天皇御宇慶安二年己丑正月八日御誕生なり

初生の容貌雄偉にして凡庸あるを見ずして早ゝ童子なるとき嬉戯常に合掌して觀音寶號を唱へ三寶恭敬の舉動のみぞ志ざしひゝる漸く成人して程なく常に鄉内なる本山の御堂に參拜して法義を

聽聞し給ふ宿習薫發の致す所にや領解滞りなく御座在しがうち
塵世を厭ひ専ら佛道に身を委ねたく御思召其由御両親に懇請た
りしかど父母の寵愛殊に厚かりければ容易に聽入給ふもあきまぞ尊
者固より孝心深く御座在しかば慈親の恩愛に背き難く餘儀なく忍び
居給ひけり然に御年十四の秋一夕夢に異僧來り尊者に告て汝今より後
三十年にして必ず大道場を闢うんと宣ふ尊者問て曰く貴僧は何人よ
て何所より來りたまふぞと彼僧荅て曰く我は磯長山より來まり即ち融
通念佛の行者なりと語り畢りて夢覚め不測の事なりと語り會ひ翌
日父と倶に彼の磯長山叡福寺に詣でゝ果せる哉開山大師の塔廟
を拜し奉り扨こそ霊夢虚しからぬと窃に大志をぞ發し給ひける

捨世志道の事

尊者既に志學の御年に至り給ふ所有六藝に通達して才智衆に
超え給ひ給れば天晴世に立て士君子と仰がれ給ふ御器量と稱へ給ふ者ぞ
あらざる然ども尊者獨り世智辯聰の恃むべからざるを知り心
中深く佛道を樂ひ給ひ四天王寺なる聖德皇太子の霊宮に詣で道
世の本懷を遂んことを祈り給ひ給ふ不思議や太子の御告ありて汝
他日出家して大に融通念佛の法燈を挑ぐべし然ども時機未だ
熟せず姑らく遲べしと宣ひたまへば尊者御喜悦限りなく宗門復
興の念彌々堅固に御座在ける御年十七に成て母小林氏に御逝去に
り其翌年父の恩命辭しがたく心に相應ぬまゝ或方より夫人を迎へ聽

て一子を擧けゐん尋いて御父御剃髪あり別に菴室を結びて念佛を
專修し後世の菩提を希せらるゝに尊者躬らゝ家事を理め業務を執り
ゐくとも毫も世塵に抱らず俗事に着しゐるこそ道心の最深きゆ由ふ
るべし尊者御年廿四あして御父みい豫め死期を知り七日の間念佛乃
聲絶ずして大往生を遂げさせらは尊者悲歎の涙に暮きゐひしゝ聽
て懇に葬儀を營ゐみ厚く菩提を吊ふひて猶生前に事ふるゞ如し
ゐゝ尊者始め十三歳あして母公現當安穩の御為に西國三十三所の
靈場を巡拜し廿歳にして再び西國三十三所の補陀道場に謁し並
びゐ諸刹の名山大刹を巡歴して御父無上菩提の資糧に擬ふくゐゐ
其孝心の最深きゝ事推して知り奉るべし然れゞ尊者御父の

喪に在りて痛哭に堪へゞ御座在しゝが自ゝ有為の危脆あるを觀じ漸
くに心決しゐひし所ゝ兎角して月日を送りゐひしゝ早や御年廿六歳ゆ
ありゐくゐ慈父の三年忌に當りゝて大齋會を開き丕に佛事を修し
即ち此日に於て金銀財寶を散じて親戚故舊七十餘人に須ち與
へ且つ年來の宿志を達し今より世事を棄て佛道に入るゝ由を披
露しゐゝ斯て盧を別莊の地に設け優婆塞の身とあり專ら佛道を修め
彼の岡山大師并に聖德太子の靈告を憶持して念言しゐゝ今や融通
の宗門祖綱泯亡し宗規廢頽す願くは微力を竭して大に復興を期せ
ん事若し成ずんバ死を以て誓ゝんと是より心を大小の經論に注ぎ思を
内外の典籍に遊ばしめゐひ更に暇日ぞあるゝけ除

勤求道法の事

尊者御年三十の頃住吉の地蔵院快圓和上に就て菩薩優婆塞戒を受け尋ひて密雲律師に從て梵網戒經を習學し覺彦阿闍梨に法華經を承け又叡山の妙立和尚の許に於て天台一家の典籍を學び鐵眼禪師に謁して正法眼藏を開き既に豫州宇和島に往き賢巖禪師に從て首楞嚴經を研究し一日禪師歎じて曰く居士出人の相あり他日選仏場に舞ふ〳〵吾老たり恨ふ〳〵之を見るあたはざる事を仍りて一偈を裁し且つ號を授けて萬峰不住居士といふ其翌年支那國の高僧黄檗高泉禪師に參禪し九旬練行せられる禪師尊者の大願なるを聞き讃して曰く真に荷法の大居士なり勉めよや千載の一遇なりと因て筆を揮ひ不退場の三大字を書して與へらる今現に般舟堂に掲ぐる者是なり斯の如く四方に周遊して一時の高僧碩德を尋ね諸家の宗要を探り悉くその秘奥を究めむ嗚呼尊者の如きは法を求むるに於て孜々として勤めむなり と謂ふべし身を輕んじ道を重んずるを深く且つ切なるに由るに非ずんそ何ぞ能く是の如くあらんや

入寺剃髪の事

尊者嶺てより扶宗の大願を立て復興の念暫くも休むことなしと雖ども尚在家居士の身にて御座在しり茲に時至り縁熟けん御年廿三天和元年辛酉の夏五月十五日本山第四十五世良観上人に投じて剃髪得度し尊者曾て観公と俱に常に法義を談じ師弟の契約淺からざりしに是

於て剃度の本意を遂むひき越て翌年復快圓和上に参じて出家の菩薩大戒を具足し兼て興正菩薩瑜伽自誓三聚の宗要を諮決し勤行彌々増進し道心益々堅固に御座在しぬ

江府往復の事

尊者観公の門に入りむ〜より観公を輔て大に宗門の復興を謀りあ〜惟ふに當時法明上人我宗を中興し〜より茲に将に四十世に垂とすきバ宗規壞乱し百弊隨て生し本末の門流その名僅に存すきども其実全く廢し宗門の衰ろへ未だ此時より甚しきハ〜ず且つ古袈裟に盧山衣天台衣と稱する者ありて服製較殊なるより門末の僧徒相互に僻執して異諍止む時なく〜かば尊者首として此濫弊を矯正さんと御思召

天和二年壬戌始めて江戸に赴き事を将軍綱吉公に白し〜ひ〜に吉趣明晰にして辭義正平なりたまバ聽て裁可を得て遂に僧徒の異諍を和融し〜む此年冬十一月圓覺十萬上人融通念佛の秘訣を雒東泉涌寺中戒光寺天圭長老に兼け又西山善慧上人蓮宗念佛の奥旨を城南深草山の龍空上人より受けあ〜是より笈を負て廣く諸國を巡歷し高德を尋ね有縁を度し〜ひ至る所行化の益ありざるなし其間有時ハ樹下に宿し巖穴に息ひ有時ハ渴を澗の流に潤ほし飢を菓實に充し如此概ね以て常〜なる〜末ざ嘗て厭ひあることなく〜一夕諸神の相告て歸省を促ぐに會ひ貞享元年甲子本山に歸着し〜ひ観公と商議し茲に籌策を定め果然意を決し再び江戸に居り詳うに宗門復興の願意を記し寺社

奉行酒井河内守、戸田能登守、米津出羽守等に依りて之を大将軍に申請ふ然れども事重大なるを以て審議遽に決し難く荏苒として年を越えたり同三年観公病篤し報ずるに由り急ぎ官暇を請ひて帰山し晝夜寢床に侍りて看護に心を盡し給ふ観公自ら起さるを知り復興の事も最懇に尊者に嘱累し衣鉢を授け畢りて奄爾として遷化せらる是に於て門末六箇大寺の宿老闔を如来前に抽き以て本山の席を継ぐの舊例を執り競ふて法席を闚ふ雖ども尊者に宿願未だ成ざるを以て敢て意と爲さざりき

復興台命の事

尊者嘗て曰く人の惟志あるを恨む苟も志ゐれば何事か成さざんや若し怠

る哉爰に尊者宗門復興の爲に再度江戸に出て事を官府に請ひ奉ると雖も時運尚熟せざるの故か宿願未だ達せず殊に先師の喪に會ひ魔車亦加りけれども精神の到る所爭で撓ませざるべき然れども復もや江戸に居り重ねて前事を請願し奏聞に固より志操勇猛身行廉潔に御座在る上に應答明白智辨流るゝ如くありけれども有司も爲に重んじ敬せざるなかりしとぞ斯て官府にも尊者の誠衷を感納せらるゝ大将軍綱吉公の裁可いよ〳〵維時に元禄元年戊辰七月十八日甫めて宗門復興の台命を下さんとする曰く方今融通の一宗弊風極まりぬ宜しく是を董すべし先つ山門頭に酒肉五辛を禁ずるの表石を立て及び本末の寺法を明にし僧衆の清規を嚴にし其餘細大の弊習を蕩盡して大に宗門の面目を改むべし其當代住持の職に至りて

且らく先例に循ひ六箇大寺の住持を以て閣を以て之に當らしめ次代より以後必ず法器を擇びて次第に附屬し師資相續して本山に住持し末寺を統御せしめ[illegible]れば尊者是に於て年來の志願滿足せりとて御喜悅限りなく天に拜し地に伏して佛祖の冥助を感佩し官府の名鑑を陳謝し[illegible]て御歸國あらて假りに天王寺の茶臼山觀音寺に寓居し時々本山を看護し[illegible]

御晋山の事

元祿二年己巳の春鈞命を奉じ舊慣に依りて彼六箇大寺の宿老を本山に召し耆年の末寺僧侶證明と爲し籤を本尊前に抽くしめ以て本山々主の席を定めらる當時尊者は六箇大寺の隨一なる八尾良明寺の席を領し[illegible]れば亦その抽籤の一人に御座在し佛天の冥贊過まらず尊者其選に當りむ

ひけるに異議なく法席も定まりけるを茲に三月廿日列伍を整へ儀裝を嚴に〻發に茶臼山を發して本山に晋參あらせらる此日林木觀を改め殿宇甍を增し法幢を建て法鼓を鳴し遠近子の如く來り長幼雲の如く集まり日に日課を受る者幾千人あるを知らず是に於て僧衆の服制を正し寺門に禁牌を建て三時六齋勤行の制規を定め末寺檀越接待の格式を設け專ら祖宗の風紀を復し偏へに殿宇の輪奐を修めらるゝ抑も今の大本堂は人皇第百十三代靈元天皇御治世寛文三年癸卯元祿二年即ち尊者御晋山の年を距ること二十七年以前に當る本山第四十三世舜空上人の建立し給ふ所なり然るに其造作なる未だ全く成ざる所少なからざりければ尊者首として本堂を修造し其善美を盡し給ふ其餘客殿庫裏宝庫等を始め山内諸堂或は創立し或は修繕し其他

一山法儀の要具を悉く完備させ又十方檀越の信施する所の祠堂供料等を積み或ハ田園を購入して以て常住三寶の資糧に備へ是の如く真俗の興隆具さに陳ずるに遑なく元禄三年請ふ應じて天得の尊像を護持し畿内千箇の末寺を巡教し是より先諸列の末寺に住する者多くハ在家似同の行儀にして真の住持職なる者極めて稀なり是故に寺門荒蕪して修繕することなく教法地を拂ひて衰廢せり尊者巡教して至る所是を匡正し悉く住持職とふ以て寺院の面目を一新し是の如き皆尊者扶宗の力なり又春秋の時正に四天王寺に於て踊躍念佛歡喜會を修すること開山大師に基し中祖上人是を継ぎ興し玉ひし尊者の時に至り更に儀式を盛にし彼寺西門の短聲堂に於て大に念佛を弘通し且つ時の舍利綱に一會の法則を寫さしめ以て規を末代に遺し又菩薩來迎會の練供養も亦一層盛大にして是より毎年絶へず執行せられぬ

詔して紫衣を賜ふ並ふ檀林勅許の事

人皇第百十四代東山天皇治世元禄七年甲戌夏五月霊元太上天皇勅して紫衣を尊者に賜ひ以て其德を顕し其綸旨に曰く

着紫衣令参内宜奉祈國家安全寶祚長久者依　天氣執達如件

元禄七年後五月十七日　　左少辯在判

攝列平野大念佛寺住持大通上人御房

斯て六月廿六日尊者参内して之を陳謝し同八年亀鐘縁起を近衛右大臣某公殿下に進覧ひけるに即ち卷尾に跋書して曾祖慧雲院博陸前大相

國公の真蹟あること紀證明〜てかくれ〜とそ其翌元禄九年丙子九月十
六日太上天皇新に宣旨を賜ひ忝も本山を以て永く一宗の檀林と為〜諸列
末寺の學侶を管領〜てその學成り臘高き者を選び其を〜て参内〜て
綸旨を頂戴〜即ち香衣を着〜以て位階を進まるゝ其宣旨に曰く
攝列住吉郡平野莊大念佛寺者融通念佛中興道場也都鄙末寺之僧
學臘成滿之輩以本山之選可令申香衣者依　天氣執達如件

右中辨在判

元禄九年九月十六日

住持大通上人御房

尊者曾て宗門復興の台命を蒙むり今亦檀林勅許の綸旨を受けゝ御歓
喜限りな〜厚く聖恩を感謝〜ゝ聽て檀林清規を製〜以て末代の亀鑑

と成〜學頭院を建て察舍を造立〜て廣〜學侶を集め常に講筵を開き人
器を撰拔〜天朝に奏聞〜て位階を進まるゝ是に由りて檀林日を追ひて繁
榮〜宗門時を得て光輝せるとそ最も美〜き御事あり其後元禄十五年壬
午洛陽北野天神の側に圓滿寺を創立〜盛に貴賤を勧めて名帳に入〜ゝ
〜が同年十月十日太上天皇忝も名帳宸翰の御序を賜ふ上皇嘗て
深〜融通念佛を御信仰の餘烏羽天皇より関山大師に賜り〜名帳序に擬
〜て斯ハ宸翰〜〜とそ此両代の帝より賜り〜る二幅の勧進帳の外に嘉慶二
戊辰の年人皇第百一代後小松天皇より本山第十四世道音上人へ賜り〜るを
加へて三幅の勧進帳〜〜我宗門に至尊御皈仰〜て念佛勧進〜ゝ外護
厚か〜〜證迹と〜て深く寶庫に秘藏せるとそ〜る

億百萬遍大珠數の事

元禄十三年庚辰の春復江戸ゝ出させられ彼地御逗留の間曽てより尊者の化益を受る者老少五千四百人力を勠せ財を投じて一串の大數珠を作り以て尊者に施し奉る珠の數ハ都て五千四百顆にて一匹三十丈ゝ即ち本山に於て三長齋月億百萬遍の舊儀に擬ぐ年毎に三たび掐ぶせ以て帝道遐昌聖壽萬歳五穀饒熟萬民豊樂を祈願ふ現今毎年一五九月の十六日ハ本山大本堂に於て此の數珠を掐りて億百萬遍の會式を行る抑ゝ我朝に於て億百萬遍の起因を原ぬれ開山聖應大師弥陀直傳融通念仏億百萬遍功德圓滿の妙趣に範とり始めて一大數珠を造り貴賤男女をして輪座圍繞し高聲念佛して數珠を掐らしめ後世百萬遍と稱る數珠掐りの盛に行あはるゝことゝなりぬ扨又是を百萬遍と名づけし所以を尋ぬれ是の如く多人和集して念佛を稱ふるとき我と人との念佛互に融通して自他等しく億百萬遍の功德を成就するの故實是にて然ば億百萬遍ハ融通念仏の妙處を顕ハせる者にして我宗の行法に於て最も要とすべき所なり彼の開山大師の造りたまひし大數珠ハ是を洛東永觀堂に納めたまふ

融通圓門章并課誦等撰述の事

元禄十六年癸未尊者御年五十五にして融通圓門章を撰述し大方に印布し抑ゝ此章ハ始め教興の本縁より終り解文義に至る迄十條以て成立し中に於て釋尊一代の聖教を判じ彌陀直傳の妙宗を建て及び佛祖の章句を解

釋して彼の發軫の輩をして是に由りて信解行證せしむるの金辭玉章ありて一家の法裔なる者一日も忽緒すべからざる所なり是れ先本宗第六世良鎮上人の著述なる融通念佛畫緣起に序引諺解を加へ梓に鏤めて世に公にし人をして宗興の由を知しめんとす上下二卷今現に流行せり既にして本宗の課誦を製し晨夕の禮誦其他一切勤行の儀軌を定め又天得十尊の畫像を縮寫し並に開山大師中祖上人の御影を添へて信徒に印施し數を知らず又實永の比融通念仏信解章二卷を著はし宗要を採釋して初學を提撕し爰に又附法の高弟忍通上人尊者一代の著述し給ふ所の種林清規本末規約を始め緣起序文記録銘詞等に至るまで總じて是を編纂し大源雜録と號して世に印行せられる此の忍通上人とは三條西正二位亞相藤原朝臣實教卿の御令息にして幼名豊麿呂公と申方を邀て嗣法の弟子と為し給ひけるが天資怜悧にして器宇衆に勝れ常に尊者の道化を補翼せしかば尊者も御慈愛も最深く副方丈として法務の大半を委ねられしが惜い哉尊者入滅に後ること僅に六年にして享保第六辛丑年夭殤せられける

般舟堂弥陀大像の事

寶永四年丁亥四月般舟堂落成を告げまゐらせ大に慶賛を修し嘗て御造立ありし上品の阿弥陀佛坐像八尺の尊軀を安置し日課加入の名帳を此尊像御臺座の内に籠めて同行諸人決定して彌陀安養國に往生するの良種と為し且つ疇昔高泉禪師に贈られし三大字の額を以て堂面に掲ぐ即ち不退場是あり又曾て良工を召し己れ等身の壽像を作らしめ爪髮を自ら身分より取て

之を植ゑ給ふ神色髣髴として容貌生るが如し即ち本堂の北邊御影堂に安置する者是なり

大佛殿落慶並に東山天皇崩御の事

寶永六年己丑四月八日南都東大寺龍松院公慶上人の請に應じて畿内末寺の僧二百餘人を隨へ大佛殿落成祝慶の佛事に參會し始め元禄元年大像修補開眼供養の折りも尊者を招請し給へるが今茲に落慶を修せらるゝに及びて復た請せられて嘉會に列し給ふ此日勅使參向し四民群集して儼儀嚴肅莊嚴善美曲盡に述るに遑なし尊者會中に於て手に磬槌を執り彼の亀鐘と擊鳴し口に融通念佛を舉揚し給ひけまへ一會の道俗貴賤男女和唱する者幾千萬人なるを知らず山嶽爲に震動し衆會歡喜せざる者なく實に絶世の美事なりしとぞ此年德川第五代將軍常憲院殿綱吉公薨去ありけまへば尊者遠く江府に赴き東叡山根本中堂に詣で奠香誦經して靈儀の冥福に備へ給ふ即ち青錢五十貫を布施せらる同年十二月東山天皇崩御まし〳〵洛陽般舟院東山泉涌寺に於て中陰の佛事を修薦し奉らる翌年正月尊者西寺に參拜し誦經奠香し給ひけまへば貨物を陸續として既にして中御門天皇御即位ありて其翌年辛卯正德と改元せらる此年春尊者手づから一卷の遺書を記し是を文庫に殘し且つ嗣法忍通上人並に授業の徒衆を集め具さに身後の事ども附屬し給ひ御身は關東遊化の志ありし及び後昆の爲に官府に請願の子細ありしかとて重ねて江戸に赴き事を官府に具狀し給ふ其翌正德二年壬辰故ありて再び本山に歸り給ひ嗣法忍通上人の爲に六字の名號を染筆し又

豫じめ殯葬の具を設け幢幡寶蓋棺槨衣衾等に至るまで悉く営備し畢りて山を辭し暫く京都の圓滿寺に寓して大に念佛日課を弘通したまふ皇后妃嬪相詣して日課を受させたまきし上は九卿百官より下庶民に至るまで入會を乞ふ者數を知らず幾程もなく月光院殿の請に應じて復た江戸に詣りたまふ月光院殿には兼てより尊者に御帰依浅からざれば天得の尊像を迎へて殿中に結縁せしめんと懇請したまひけるに尊者請を聽したまふ諸の官女の為に授戒説法して名帳に加入せしめたまふ其餘府内の衆人相傳へて入會を乞ふ者日に數百人なりしとぞ此年十月第六代將軍文昭院殿家宣公薨去したまふ誦經唱嘱先代の例の如し此後両三年或は名山霊壌に遊歴し一時の高僧水戸天聖寺の蘭山禪師及び増上寺の祐天上人等の諸師と相往來し或は諸刹の大小

名に帰依せしめ化益最も多かりける斯て尊者申請の事將軍薨去等の不幸に遭ひ未だ官府の允許したまはざるに拒言して帰國したまはし是偏に尊者の大慈後世法孫を眷顧して福利を身後に貽したまふんとの御思召に申したまふこと最有難き恩旨なりけり

御入寂の事

享保元年内申の春尊者江府に在りて微恙を示したまふ病中徒衆を集め此度は定めて遷神なべき由申聞に懇に身後の事をも御告したまふ又本山へも手書を以て再三垂諭したまひき閏二月十日俄に本宗數珠の制を定めたまふ即ち五十四顆の蓮内是なり其最後に臨んで猶法愛を後昆に垂れたまふこと是の如し又手づから遺誡を記したまふを囑累して曰く

夫融通大念佛宗日本永久年中彌陀示現直授沙行多聞尊天護念正宗現除災難當成正覚窃謂諸法實相十界圓融阿鼻依正毘盧身土水波相即非異非同倘論隔歴實戻祖意是以名籍日課之輩則不論有智無智不隔此男他男一行即一切行一念即億百萬事々融通理々無礙故契華嚴法華圓頓微妙教意救極悪深重下劣凡夫無妙而不盡無機而不投可不信乎可不仰乎開祖上人滅後百八十四年弊風漸扇法明上人出而中興嗣後三百六十六年賢善潛蹟狐兎犇走融通正脉掃地而盡大息流涕可悲之甚於是老僧趨詣江府告訴再三敬遵公命去垢磨光一宗儀範濟々可観自謂法明之後聊為中興老僧滅後住茲山者讀此手書省自勵他則老僧在寂定照鑒微笑囑々

正徳六丙申年閏二月十二日融通正傳四十六代中興賜紫沙門大通手書

即ち此日に於て沐浴して浄衣を着し一心に天得の本尊を拜瞻し徒衆と倶に如法念佛しものに上三遍に至りて異香室内に充ち綵雲空中に映じ面の〻顔王来迎の勝相を感じ奄爾として寂を示しぬ齢六十有八戒臘三十有六第三日に至りて東郊仙樹の香楼に荼毘し奉り五色の舎利数百粒を拾い得たり是併ら法の為に粉骨碎身して性命を犠牲に供へ功徳の致す所なりと人々感歎しけり

舎利歸葬の事

日あらずして徒衆等身骨を奉じて江府を出立し本山に赴く途次見聞の諸人相俱に迎へ拜して悲哀せざるものなし既に郷門に莅めば嗣主忍通

上人僧衆を帥ひて徒行拝迎し遺骨を拝瞻して慟哭悲泣為す所を知らざるが漸くに葬支を整へ四月十五日重ねて荼毘を修す此日難波の官司式場を警護し會葬の僧衆三百餘人檀信有志来り會する者其數を知らずと云ふ嗚呼尊者少稚にして聖德皇太子及び開山大師の霊告を蒙りて扶宗の念一日も休むことなく竹杖草鞋箱嶺を往復し前後十有餘回艱難を忍び辛苦を嘗めて官府に周旋し遂に宗門再興の素懐を達し我宗の法燈を將に滅せんとするに挑げて且奉ずる至尊の皈仰を蒙り紫衣を賜ひ檀林を開闢し等亦盛德の至りなり尊者一代の化導上は王公將相及び夫人采女より下萬民に至るまで日課を受る者総て二十餘萬人又受法の嵩足五六人親化の者百五十人度縁の僧尼五百廿四人なり又山内殿堂坊舍を創建する者三十餘宇列祖の石塔を改造する者四十五基その上田園を購ひ淨財を積み以て常住僧物に充る等凡そ尊者一代細大の行為一として後世兒孫の為あらざるなし是故に百歳の下その遺書を披覧し其肖像を瞻禮する者をして中心敬服し彷彿相見るの想を為さしむ豈證理の聖者衆生を憐念するが故に願載に乗じ慈舟を泛べ此界に化現しもあに非ざるを得んや此餘尊者一代行化の間霊異奇蹟も最多けれども具に記すべき遑なく且つ畧して其要を擧るのみ

再興大通尊者傳終

融通念佛宗三祖畧傳終

大源山勸學林藏版

明治二十年一月十三日出版御届
同　年四月　發兌

賣捨五錢

著述人　大阪府平民　平岡順亮
大和國添上郡奈良鳴川町第七六番地居住

出版人　大阪府平民　醒井倍全
大和國平群郡勢野村第百三十二番地居住

印刺淨貶喜捨人名表

一金貳圓　大和國櫻井驛來迎寺　靈了覚
一金三圓　大和國小平尾村寶幢寺　殿水円快
一金三圓　大阪難波法照寺　今大路慈静
一金三圓　大和國勢野村勢谷寺　醒井倍全
一金三圓　大和國奈良德融寺　仲野順海
一金八円廿錢　明治十九年両脈加行　僧尼中
一金三圓　大和國嘉幡村　森島猶遥
爲　森光院順應良誓禪居士先祖代々

一金二圓五十錢　大和國辻村釋尊寺　小野智覚
一金二圓　大和國十市村　吉井善十郎
爲　父母菩提

一金二圓　河内國第四教區寺院　住職中
一金二圓　河内國国分村西光寺　西尾慈明
一金壹円五十錢　大和國菜畑村大融寺　廣岡智礼
一金壹円五十錢　大阪天王寺村脈戒寺　箸尾良盈
一金壹円五十錢　大和國郡山圓融寺　梅原靈巖
一金壹円五十錢　河内國西村正念寺　岡田太誠
一金壹円五十錢　河内國富田林村淨谷寺　今大路慈著
一金壹円五十錢　河内國誉田村金田寺　本田義道
一金二圓　摂津國田邊村　橘　光仁
一金壹円五十錢　同　國　平野郷　井上　治
爲　家内安全

一金壹圓　摂津國田邊村　橘尚右エ門
一金壹円五十錢　大和國　嘉幡村　辻田源作
爲　光含妙照禪尼

一金壹円五十錢　大和國　南菅田村　道澤源平
爲　道光照傳俄德禪定門

一金壹円五十錢　大和國　南菅田村　菅田太平
爲　先祖代々

一金壹円五十錢　大和國　宮堂村　乾奈良吉
爲　正明院融山遍覚勝道禪居士

一金壹円五十錢　大和國　宮堂村　仲彦三郎
爲　先祖代々

一金壹円五十錢　大和國　宮堂村　乾源内
爲　先祖代々

一金壹円五十錢　大和國　宮堂村　藤井平藏
爲　先祖代々

一金壹円五十錢　大和國　結崎村　片山太郎
爲　先祖代々

一金壹円五十錢　大和國　結崎村　片山甚太郎
爲　先祖代々

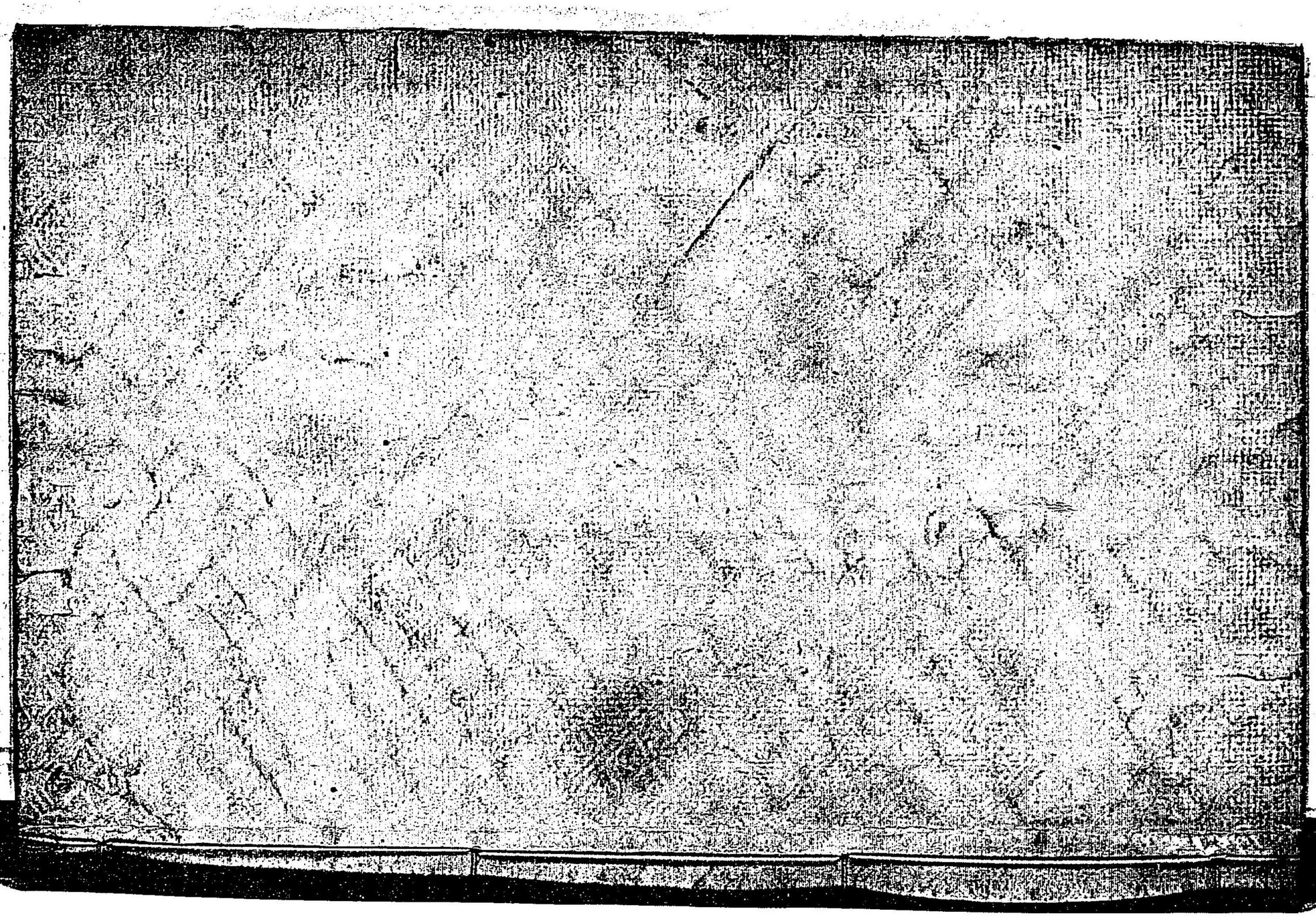
一金壹円五十錢　大和國　結崎村　稍垣兵作
爲　先祖代々

敬岳妙華信女　森川吉藏
石橋作三郎

大阪山縣學林
大原山勧學林

一金壹円五十錢　摂津國山之内村　畑山定右門
爲　真入道本信士　同　國　喜連村　増池雄二郎
一金壹円五十錢
爲　清浄和禪定門　同　國　同　村　服部彦二郎
一金壹円五十錢
爲　玉光良意信士
一金壹円五十錢　河内國　大黒村　善覚寺　大永寺　樫　中
一金壹円四十錢　摂津國　杁本村　山野房五良
爲　清光妙貞信女　頭心智光信女　智貞童女
一金壹圓　大和國　十市村　水願寺　魂　榮願
一金壹圓　河内國　黒谷村　意滿寺　黒田覚別
一金壹圓　摂津國　西国分村　淨長寺　中川実道
一金壹圓　大和國　奈良法德寺　倍巖良教
一金壹圓　大和國　古市村　念佛寺　南國真量
一金壹圓　同　國　多村　念佛寺　岡沢良善
一金壹圓　同　國　東田村　大念寺　礫　關通
一金壹圓　同　國　法貴寺村　西菅寺　梅原太亮
一金壹圓　同　國　小明村　稲藏寺　円智銃
一金壹圓　同　國　俵口村　阿弥陀寺　清原教全
一金壹圓　山城國　木津驛　西教寺　西橋良意
一金壹圓　大阪天王寺村　觀音寺　淺田靜明
一金壹圓　大阪天王寺村　阿弥陀寺　見正宝樹
一金壹圓　大和國　棹田村　常楽寺　喜多良学
一金壹圓　同　國　矢田村　光蓮寺　大山良洞
一金壹圓　河内國　中宮村　西方寺　林　樫　椙
一金壹圓　河内國　食治村　光明院　伊藤桂別
右各爲公益吉提
一金壹圓　同　國　河内國　堀溝村　大念寺　開本照道
爲　宗門繁栄
一金壹圓　河内國　春日村　大聖寺　松室晃山
爲　龍照院早岩準海上人
一金壹圓　摂津國　喜連村　法明寺　清原義道
一金壹圓　大和國　二名村　法融寺　村上戒尊
一金壹圓　大和國　三輪村　多聞院　村上養山
一金壹圓　同　國　上村　福滿寺　高島円良
一金壹圓　河内國　青谷村　青谷寺　戸田海全
一金壹圓　大和國　藏堂村　淨福寺　大原仙立
一金壹圓　同　國　官堂村　觀音寺　松村仁隨
爲　光明院鎌学仁誠上人
一金七十五錢　大和國　下永村　松村善吉
爲　先祖代々
一金七十五錢　泉州　堺　區　柳之町　岡田けい
爲　德全曜英居士　慈光宝球禪門
一金七十五錢　同　同　甲斐町　淺尾孝壽惠
爲　清可院緣岡宗樹居士
一金七十五錢　同　同　戎之町　田中源次郎
爲　探室知孝禪尼　頻善孩女
一金七十五錢　同　同　戎之町　木家藤平
爲　迦融藤巖善士
一金壹圓　大阪　八川宇之助

一金壹圓　山城國祝園村　森嶋峯治郎
爲　釋教忠居士
一金八十錢　大和国矢田村　泰楽寺　岡沢良井
一金七十五錢　同　國　猫村　真願寺　長沢良弘
一金壹圓　同　國　梧木村　大倉直市郎
一金七十五錢　摂津國　喜連村　服部助次郎
一金七十五錢　同　國　同村　照部九右門
一金七十五錢　同　國　杁村　杁本久幸門
一金七十五錢　同　國　村　長橋猶造
一金七十五錢　大阪天王寺村　松井宮廣太郎
右各爲先祖代々
一金七十五錢　大和國山嵜村　安養寺　梅園本学
一金七十五錢　大和國中村　弥勒寺　金森祐造
一金七十五錢　同　國小瀬村　觀泉寺　瀬川円願
一金五十錢　同　國藤尾村　石佛寺　澤井円龍
一金六十錢　同　國乙田村　石福寺　石川実円
一金七十錢　同　國大安寺村　融福寺　吉村良阿
一金五十錢　大　阪天王寺村　松井寺　岩田良賢
一金五十錢　大和國典留村　栗本宗意
一金五十錢　京　都清水寺在行　菊本明道
一金五十錢　大和國六條村　大通寺　井上智円
一金五十錢　大和國大福村　村嶋平治
一金壹圓　同　國　同　村　何　某
一金壹圓　同　國　同　村　廣吉甚一郎
一金壹圓　同　國　同　村　喜多龍太郎
一金五十錢　大和國大福村　原田美登
一金五十錢　同　國同　村　森清六
一金五十錢　同　國三輪村　法念寺　礫良円
一金五十錢　同　國　同　村心念寺　小野專静
一金五十錢　同　國同村　瑠璃光寺　萩原明天
一金五十錢　同　國南檜垣村　元暦寺　平野聞静
一金五十錢　同　國阪手村　阿陀寺　河合聞達
一金五十錢　同　國標之本村　大典寺　田中隨虎
一金五十錢　大和國山田村　遍光寺　土岐静貞
一金五十錢　同　國森本村　靈仙寺　栗坪瑞宝
一金五十錢　河内國茄子作村　本誓寺　吉沢豊山
一金五十錢　同　國私市村　松宝寺　清原玉誠
爲　実岩義誠上人
一金五十錢　大和國高山村　西方寺　巻本蓮乗
一金五十錢　摂津國喜連村　服部常吉
一金五十錢　同　國同　村　淺井庄太郎
一金五十錢　爲紫光明雲信女　永橋栄三郎
一金五十錢　爲香室淨薫信士　杁本治三郎
一金五十錢　大和國有里村　典融寺　殿水静性
一金五十錢　同　國一分村　称名寺　德田泰蓮
一金五十錢　河内國高井田村　高井寺　小松勧隨
一金五十錢　河内國飛鳥村　常念寺　本田良道
一金五十錢　同　國廣瀬村　心光寺　清原光願
一金五十錢　大和國長柄村　長福寺　前川覚山
一金五十錢　大和國典隆寺村　地藏院　大原瑞導

大原山勧學林

一金五十錢　大和國矢部村安樂寺　久保良円
一金五十錢　同　國田原村樂田寺　田中随叡
一金五十錢　同　國今里村正福寺　弛順覚
一金五十錢　河内國小倉村長安寺　柵井如空
一金五十錢　京　都　桑原家
一金三十錢　河内國喜志村安樂寺　竹腰孝道
一金三十錢　同　國上田原村正傳寺　磯野値山
一金五十錢　大和國小川得明　〃　藤戸善壽
一金三十錢　河内國太秦村太秦寺　關本熙通
一金三十錢　和泉國堺區末廻寺　穂積清一
一金三十錢　同　國同區林昌寺　辻村教戒
一金三十錢　同　國同區　森田天戒　〃　乾やゐ
一金二十錢　京　都　大倉義三
一金二十錢　大和國大安寺村　熊本明順
一金五十錢　同　國上村安養寺　米原円誠
一金五十錢　同　國立野村観音寺　横山赤陰
一金五十錢　同　國奈良高林寺　稲葉壽明
一金五十錢　同　國二名村阿弥陀寺　中本清教
一金五十錢　河内國衣摺村長覚寺　黒田亮州
一金五十錢　同　國竹山村長福寺　池田龍雲
一金壹円五十錢　同　國小吹村西恩寺　堀野義隆
一金三十錢　同　國錦部村極樂寺　内源知静
一金五十錢　河内國善根寺村菩提寺　清原秀禅
一金五十錢　同　國　同　村　東阪太郎
一金五十錢　同　國　同　村　向井猶藏
一金五十錢　河内國善根寺村　木下善太郎
一金五十錢　同　國日下村　定井傳治
一金五十錢　同　國芝村　山中貞治郎
一金二十錢　同　國　同村　寺西嘉平